青森の漆
―縄文時代①―

伊藤由美子
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

青森市岩渡小谷（4）遺跡出土舟形容器（手前はウルシ材）

青森県で漆といえば津軽塗りだが、漆の歴史は古く縄文時代までさかのぼる。遺跡からの出土品をもとに数回にわけて青森の漆ついて述べていきたい。漆の原料であるウルシ（*Toxicodendron vernicifua*）はもともと日本に自生していない植物であり、原産地は中国と考えられている。

日本で最も古いウルシは、約12，600年前、縄文時代草創期に福井県鳥浜貝塚から出土している。北海道では縄文時代早期（約9，000年前）垣ノ島B遺跡の墓から漆を使った副葬品が出土している。中国では浙江省跨湖橋遺跡から約8，200年～7，000年前の木弓が出土している。そのため現段階では日本の方が漆の利用が早いと考えられ、いつ大陸から日本へウルシが持ち込まれたかが課題となっている。

縄文時代の遺跡からの出土例は東日本・北日本が多い。当時この地域の植生はブナやコナラなどを中心とした落葉広葉樹林であった。かつて中尾佐助らは『照葉樹林文化』などで、漆利用は南から照葉樹林と共に伝播したと述べているが、東南アジアで使われている漆は別種を使用していることから、現在ウルシの利用は落葉広葉樹林と共に広がったと考えられている。

青森県で最も古い漆（ウルシ）の利用例は、青森市岩渡小谷（4）遺跡と野辺地町向田（18）遺跡である。青森市岩渡小谷（4）遺跡では、丘陵から沖館川へ注ぐ沢から縄文時代前期の木材を四方に組んだ水場（木組遺構）が見つかった。

周辺から漆器の破片、ウルシ木材で作った容器、ウルシの果実が出土している。また水場の木組遺構の部材の一部にウルシが使われていた。ウルシの木は軽くて、腐りにくい特徴があり、現在でも漁網の浮子に使われている。樹液の利用だけでなく、特徴を理解したうえで木材も利用していたことがわかった。またウルシ木材とウルシの果実が出土したことから、遺跡の周りでウルシを栽培していたことが明らかになった。

出土した漆器は赤漆塗りでベンガラを入れた漆で上塗りされている。漆器の断面を観察すると、現在の漆器とほぼ同じように下地→中塗り→上塗りの順で層状に漆が塗られ、また顔料であるベンガラも非常に細かい粒状であった。

野辺地町向田（18）遺跡では縄文時代前期の低湿地から漆器とウルシ木材が出土した。そのうち、赤漆塗り突起付木胎漆器（野辺地町指定文化財）はコナラの木を刳りぬいて作った容器であるが、突起の頂部に直径約6㎜前後の貝の蓋が埋め込まれていた。螺鈿細工の原型である可能性も指摘されている。容器全体が赤漆で塗られた器の縁に、白く丸い装飾を施したかたちになる。他には黒漆の器も出土している。

また沢の堆積物からウルシの花粉が見つかった。ウルシは虫を介して受粉するため狭い範囲でしか花粉が飛ばない。そのため遺跡内でウルシを栽培していたことが考えられる。

このように青森の縄文人は約6，000年前にはウルシを栽培し、その樹液を精製して漆を造り、漆器製作などを行っていたが、その技術力の高さは現代と変わらないものであったことがわかってきた。約9，000年前に北東北に落葉広葉樹林が拡大して以降、森と共に暮らしてきたからこその技術であるが、同時に高い芸術性も持っていた。